こけし収集家の狂奔ぶり

橋本正明

今年三月小田急百貨店七階画廊において盛秀太郎喜寿記念展が開かれた。

通称盛秀は青森県温湯のことけし工人、大正時代より五〇年余こけしの製作に従事している。こけしが百貨店の美術部に関係するということは前代未聞の話である。

当日会場に行って見ると入口左右に一対の祝花、それぞれ参議院議員、黒石市長の札が立てられているのにまず一驚。

会場中央のガラスケースには盛秀五〇年にわたる製作の変遷を偲ぶ各年代の作品、これは在京収集家のコレクションよりかなりの苦心をして集めたという。壁側の陳列棚には近作を中心に戦後作と、盛氏の愛弟子奥瀬鉄則君の作が並べていた。

このように一工人の体系的な展覧を見ると作者の人格はおのずからその精神的移り変りまで感じられる。

極く初期のものはグロテスクで濃厚、谷川徹三氏なら縄文的原型を見てとるのではなかろうか。作者の穏健な性格を反映してか次弟に表情がやさしくなり、最近作は感情が形式として静止するようになっている。

さて会場の一隅に不思議なものがあった。二×三メートルの机の上一面に並べられた大学ノートである。ノートの表紙にはマジックで各々番号が記してある。居合せた奥瀬君に尋ねたところ、これはこけし抽選用だという。そう言われて気付いたが、陳列棚の一部に一番から二五番まで番号のついた作品が並べている。実は即売用であるが数が二五本に限られているため抽選で頒けるという苦心の配慮をしたらしい。

一番の作が欲しい人は一番のノートに自分の名前と住所を記入するわけである。抽選は最終日の前日、運の良い人が最終日にやっと入手できることになる。盛秀の最近の製作数は年一〇〇本前後、入手は甚だ困難、人気のある工人でもあり多くの人が渇望している。

後日聞いた話であるが、初日開幕時には関東近県はもとより関西方面から も大勢の人が即売目当てに集まり、百貨店開店と同時に四方の階段、エレベーターから画廊入口に殺到したという。抽選ということでの人たちはガッカリしたらしいが、二五本の取り合いにでもなったら大混乱になったに違いない。尺二寸(約三六センチ)一万二千五百円で抽選日には一本に百名の申し込みとなっていた。

これは新しい作の話だからまだ穏やかであるが、事が古品になると大変である。

盛秀も含めて伝統こけし古品の入札会が都内の民芸店で年二、三回開かれるが、熱心な人になると出品作の下見を何回も行なって研究する。職前のものは署名、年齢の記入等いっさい無いから誰の何年頃の作か、出来はどうか、保存はどうかと文献と首っぴきで調べる。全工人の経歴と各年代の特徴を記した辞典までできている。

入札日間近になると収集家の間にいろいろの情報が乱れ飛ぶ。自分の狙った物ライバルはどの程度注目しているか、相手のコレクション内容と好みを頭に浮べて疑心暗鬼に悩む。几帳面な人は過去の入札に関するデータ、即ち落札値・落札者などを記録しており僅かな安心を得ようとする。

入札当日は締切が夕刻にもかかわらず午前中から会場へ詰め掛けて他者の視線に神経をとがらせている人、感情を表わすまいと無関心多弁になる人、沈痛な面持ちで黙りとくってしまう人などさまざまである。締切から開票までの間に皆で出品作を批評しあう。ここで当日の入札品の価値の体系がほぼ決まるわけであるから、札を入れている人は気が気でない。

しかし開票が終って結果がわかると鬼のような顔をしていた大のおとなが相好を崩して包んでもらったこけしを撫でまわし、つい先刻まで敵同士のようにしていたライバルと百年来の友人のように大笑いしながら帰るのである。

物に執着する世界は、ドロドロした情念が渦巻いていて感情が生のまま表われる。美しいと感じる感じ方も、良い作を手に入れた感激も、とられた悔しさもこの世界を経験したことのない人には想像もできないだろう。

かくいう私もこけしに狂奔している一人である。たかがこけしに狂気の沙汰だとお思いの方はぜひ本当のこけしの名品と対峙してみることをお勧めしたい。

（こけし研究家）

盛秀太郎　大正末期